

令和 6 年度 第 2 回 川崎市岡本太郎美術館部会 会議録

■日時 令和 7 年 3 月 5 日（水）14:00～16:10

■場所 川崎市岡本太郎美術館 創作アトリエ

■出席者

委員 加藤弘子、長門佐季、橋本善八（部会長）、藤嶋俊會 [オンライン]

事務局 佐々木（副館長）、佐藤、重森、片岡、石原、五十嵐、喜多、加藤、
澁谷、千村、鈴木、細川、井上（市民文化局市民文化振興室）
小山（指定管理者）、山内（指定管理者）

■傍聴者 0 名

■議事

・令和 6 年度 事業経過及び報告

- 1 展覧会事業
- 2 資料収集・整理、調査研究
- 3 作品の保存・修復、貸出
- 4 クラウドファンディング
- 5 普及企画
- 6 協働・連携
- 7 広報活動
- 8 施設・設備の整備
- 9 その他

・令和 7 年度事業予定

・令和 6 年度事業評価

■議事録

○開会

【佐々木副館長挨拶】

【配布資料確認】

【会議公開・議事録作成に関する説明】

事務局より全委員の半数以上である 4 名出席により、会議の成立を報告。
傍聴希望があった場合、公開とする旨を確認。

【橋本部会長挨拶】

【事務局より議題 1（展覧会事業）について説明】

藤嶋委員： 企画展の「岡本太郎に挑む」について、浅井さんと福田さんの組み合わせは結果的にとても面白かったが、ふたを開けるまでは、大変なことが多かったのではないかと想像する。太郎さんが対極主義を言っているが、企画展では現代美術の作家が対極みたいな感じになっている。浅井さん対太郎さん、福田さん対太郎さんという組み合わせについて、チラシなどを見た感じでは浅井さんは大丈夫だろうかと思う部分があり、福田さんは独特な切り口で面白いものを見せてくれるかなという期待はあった。結果としては、浅井さんは突き抜けていて、土と血と文様を素材にしてペインティングしているものは、太郎さんのペインティングを通り越しているのではないかというすごさがあった。エネルギーというかモチベーションというか強いものを持っていると感心した。図録については親切で分かりやすくできていた。図録を見て、福田さん親子が3人、岡本太郎親子も3人ということからか、その描かれている絵に福田さんも関心を持っていて、子供のときはこういう感じで一面仲良くしていながら色々ドロドロしたそういったものが育っていく、そういう人間性みたいなものに福田さんは興味がある、ということを知ることが出来た。二人の作家の組み合わせの展覧会を企画するということに自分は興味があって、以上のようなことを感じた。

TARO 賞は先日の内覧会に参加したが、記者と作家全員が集まって話が出来るというのは非常に良い。生の声を聞いてやり取りしながら、話を発展していくことができ、そして作家がどういうモチベーションで作品を作っているのかがだんだん解けてわかってくる。表面的に見ただけではわからない、作家に聞かなければわからないというところがあったり、自分と作家と同じような考えを持っているとわかることもある。自分は青木繁がすきなのだが、今回、青木繁の絵を取り込んでいる作家が二人いて、千葉の海岸線を描いた作家の作品にも出てきていた。今回もいい展覧会だった。粒がそろっていて、同じような若い人が集まっていることもあるだろうが非常に面白かった。

加藤委員： 春のゴールデンウィーク、夏休み、秋、それぞれの時期でタイムリーなテーマで1年間全体として展覧会が構成されている。また、集客を図るというだけではなく、それぞれのテーマが非常に分かりやすく、身近なテーマを通して岡本太郎という作家にアプローチ出来るよう工夫がされている。美術館総体として素晴らしい活動をしていると感じた。さらに、例えば、「食」がテーマであればキッチンカーが賑わいを作るというようにそれぞれの関連事業も企画展を補うものとして実施されている。キッチンカーを美術館で呼ぶというのは意外と大変であったりする。例えば、キッチンカーの位置づけはどうするのか、レストランとの兼ね合いはどういう事であったり、場所を貸すのか、賃料をどうするのかなど事務的な手続きが大変だったりする。そういうようなことをさらっとやっているように見える。資料で報告している内容以上に非常に深く皆さんが努力されているの

だろうということが見えて大変に素晴らしい活動だと思った。

長門委員： 企画展については、特に作家との交流と地域ということがポイントだと思った。今回は市制 100 周年、開館 25 周年ということで力を入れて取り組まれたのだろうと思う。たくさんの作家に協力をいただいているのでかなり大変であったらと思う。ただ、今デジタルでも作品が見えるという中、作家との交流があるというのは美術館ならではの、美術館はそういう場所であると思う。特にお子さん連れの企画では作家と直接接するというのは忘れられない記憶になるのではないかなと思う。そういう意味で、担当者としては大変なことではあるが、いくつかのイベントや展覧会の構成の中で作家を巻き込んでいてうまくやっているなと感じた。また、浅井さんの作品では地域の土を使ったということもあるが、やはり、地域ということと作家との交流を意識した企画を 1 年を通して実施しているということが素晴らしいと思った。さらに間口の広い切り口を用い、たとえば常設展においては「オバケ」や「コンペイトウ」等のように、分かりやすく親しみやすいキーワードから展覧会を観るという機会が持てるという広がりがあった。また、いきなり大人になってからではなく小さい頃から美術に慣れ親しむということは重要で大事なことであり、特に地域にある美術館ではそういう機会を提供することは大変重要なことであると思うので、ワークショップ等を通じてそれを実現されているのは素晴らしいと感じた。

また、アンケートの結果では「初めての来館」と答えている人が多く、これが将来のリピーターに繋がっていくのかと期待している。

橋本部会長： 「太郎の食」展で「炉ばた」（御菓子）を販売したのはなぜか。

事務局： 太郎さんが「炉ばた」に近づいて撮っている写真があり、展示を行っているためである。

橋本部会長： そういうゆるい感じもお客さんにとっては大事なこと。浅井さんと福田さんの展覧会の入場者数はすごい数字。魅力的な展覧会であったと思う。また、多くのボランティアが参加したということが口コミを広げる大きな要因であったという気がする。確実にリピーターになってくれると思う。現在、世田谷美術館では収蔵品を使った「緑の惑星」という植物をテーマにした展覧会を行っており、区内の約 1250 人の子どもが約 1300 個の吊り下げる植物を作ってくれた。その展示作業を延べ 450 人のボランティアで行った。そういう人たちはそれぞれが発信者になるということが大いに期待できると思っている。このような事には、この美術館もよく取り組んでおりお子さんの参加も多い様子がうかがえた。。

TARO 賞の説明の中で、作家が何度も来館しなくてはならないとあったが旅費はどうなっているのか。

事務局： 入選作家には、共に主催している岡本太郎記念現代芸術振興財団から 10 万円支給することになっている。それを設営の準備や旅費に充ててもら

事にはなるが、今回は、沖縄、北海道、九州等遠方の入選者が多く、下見・展示・撤去・授賞式・イベントを含めると5回ほど来館する必要があるので、負担に感じる方がいた。それについては、事務局のほうでは、応募要項に下見や設営にくる必要があることを明確に記載する方が良いのではという意見が出ている。

橋本部会長： 負担が枷になりいい作家がいても応募できないということになるのはどうであろうか。どのコンクールでも同じで、なかなか難しいことではあるが、運営サイドで手当てをするというのを多少考えていかないと思う。

事務局： 準備金が出るのは今年で2回目。それまでは一切出ていなかったもので、それに比べると改善はされていると思う。ただ、今年は特に、遠方からの学生が多かったので大変であったと思う。これまでのTARO賞では遠方で来られないという方はあまりおらず、TARO賞に入選して展示できるということで喜んでやっていた部分があった。それでも、若い人で遠方の方にとってはやはり大変であろうと思う。

加藤委員： 沖縄や北海道の作家は出展しづらいと思う。もちろん入選するという喜びが大きいということはあるが、それにかかわらず、作家にとって展示するために必要な十分な実質の負担は、距離に応じた形で何らかの手当てされたほうがいいのではないかと考える。これは、別件で思ったことではあるが、沖縄の作家や遠方の作家は東京では紹介されづらいという傾向が若干あるのではないか。例えば、沖縄の作家などは入選したとしても作品の運送が大変なので、小さめの作品が選ばれるという傾向が無きにしも非ずではないか。そういう点でいうと、一律10万円も素晴らしいと思うが、実質上の経費に対する配慮が出来るかと応募する人にとってもいいと思う。

事務局： 昨年度から準備金が支給されるようになったのも作家の負担が大きいだろうということから始まっている。今年ほど負担を感じるという声を聞いたのは初めてで、改めて課題だとは思っている。記念館と一緒にやっている事業であり、負担は記念館がしているので相談しながらになっていくと思う。審査については出身地にかかわらず作品そのものを観て審査しているので、公平性は担保できていると思う。

橋本部会長： 実際には入選者は24名なので240万円の負担になり、確かに大きい。浅井さんは来館者との交流がたくさんあったようだが、福田さんはなかったのか。

事務局： 展覧会を開催するにあたり最初に福田さんにお話しをした際に、福田さんからワークショップ等の交流イベントはやったことがなく、遠慮したいとお話だった。

【事務局より議題2（資料収集・整理、調査研究）から議題9（その他）について一括して説明】

長門委員： 教育普及事業と広報の活発な発信の効果が出ていて、それらの活動と展覧会の内容が一致して来館者増や普及的な浸透に繋がってきている。今は

SNS はかなり効果的なので、そういう意味でも広報に力を入れているという印象を持った。収集・保存については例年大変だが確実にされている。神奈川県では、磁気テープとフィルムの保存についてしきりに言われているところではあるが、これだけの仕事量をこなしながら作品保護・活用・デジタル化等を行っていくというのも大変だと思う。引き続き頑張っていたきたいと思う。

藤嶋委員： いつも感じるのは教育普及がきめ細かいという点。よくされていると感心している。

加藤委員： 広報の担当者は何人か。

事務局： 一人である。

加藤委員： 広報がすごいと思う。行政は、SNS、WEB サイトが基本無料なのでそこに頼ってしまう傾向が強い。しかし、こちらはきちんといいタイミングで有料広告を打っている。これは、広告の効果を一段上げる。自分は広報の担当者がある美術館と担当がおらず学芸が広報も兼務している美術館を経験しているが、こちらでしているのは専門性の高い広報で、一人でしているとは思えないレベルの広報がされている。戦略性もあり経費的にもいたずらに経費をかけずに非常に戦略的に効果のある広報が練られてるという印象を持った。

クラウドファンディングの成功について伺いたい。これは市の仕組みの中で行っているのか、それとも美術館として専門の会社を通して行っているのか。

事務局 市が行っているふるさと納税のサイトを通して行った。ふるさと納税の中の「ふるさとチョイス」というサイトが行っているガバメントクラウドファンディングという仕組みがあり、市の方でそこに参加しているので当館もその仕組みの中で実施した。

加藤委員： 非常に成果をあげられている。

事務局： それに関しては、岡本太郎という強みがあったと思う。市がやっている他の事業のクラウドファンディングでは達成しないところもあった。達成しないとその予算内で事業を行う必要があり、達成できないと事業実施が厳しくなる。我々も3つの取組を予定し、どれも欠かすことのできない取り組みなので、達成するまでは心配な部分もあった。結果的には、目標額を上回る支援をいただいた。支援いただいた方の言葉を見ると、視覚障害をお持ちの方を支援できるのならば支援したいという気持ちが強く本当にありがたかった。また、若干の余剰がでたので《こどもの樹》の3Dレプリカが作ることが出来、視覚障害の方の鑑賞の支援になっていければよいと思っている。

加藤委員： 狙いを絞ったということと、岡本太郎というネームバリューがあることは強い。行政のクラウドファンディングは失敗する事例も多いと認識しているので、岡本太郎美術館のクラウドファンディングには注目していた。寄附のベースには美術館としての知名度、広報や展示の内容なども含め美術館

全体に対する共感・理解があったと思うので非常に参考になった。ただやればいいということではなく美術がどういう活動を今までしてきて、どういう層に支持を受けてきたのかということを中心に自覚したうえで実施したということが成功の要因であったと羨ましく感じた。そういう点でいうと美術館の活動全体のバランスがよいと思う。認知症の人のプログラムが場所の関係から断念せざるを得ない状況になったという説明もあったが、この美術館に向くプログラムがあると思う。無理に認知症の人のプログラムをやらなければならないと考えるより、ここに合ったプログラムを伸ばしていく方が、達成感を得られやすいのではないかと思った。一つの美術館で総合的に全部するというのではなく、地域を広く持ちそれぞれの館が役割を持っていくというのも考え方としてあるのではないか。例えば神奈川県であればその中でそれぞれの美術館としてどういうサービスをどうしているのかということを考える。そして、その中で特色を出していくということも一つの方法であると説明を聞いて考えた。

事務局： 加藤委員から最初に出た広報に関して、指定管理業務となっており、民間の知見を活用し発信してもらいたいという趣旨でお願いしているものである。そういう意味では民間の方の知見が十分発揮できていて、今日の効果に繋がっているのではないかと考えている。

加藤委員： 確かにそうだと思う。自分は指定管理の美術館から直営の美術館へ移ったが広報の考え方についてはやはり違う。広報の仕事も学芸・事務の仕事と同様にプロフェッショナルの仕事であり、プロフェッショナルの集団の中の一つのパートとして広報があるということをきちんと認識できている美術館としての強みはあると思う。

橋本部会長： レティッサオンハンドを使ったりされていたが、今後の視覚障害者への鑑賞支援の展開はどのように考えているか。

事務局： レティッサオンハンドは使用した方には非常に好評ではあった。ただ、今回はクラウドファンディングの寄附金で行ったが、費用的にある程度かかった。今後は様子を見ながら検討していく形で考えている。

橋本部会長： 広報と普及事業についてはすごい展開をされていると思う。実施プログラムが非常に多く、これだけの仕事をこれだけの人手でやっているのかと思うと感心する。これからの時代の美術館のあり様を示していると思う。

加藤委員 広報は一人でとても良くやっていると思う。ただ、本当は近い将来でも複数になると、色々な対応が出来るようになる。休みや休館日、閉館時間のケアなど様々あるので複数人で対応したほうが、息の長い形で広報活動を進めていけると思う。ぜひ、検討をしていただくと良いと思う。

橋本部会長 災害時やパンデミックの様な緊急事態の時にどうするかということでは以前に非常に苦労した。広報の拡充は美術館の生命線といえる。認知症の人のプログラムはどういう経緯で行ったのか。

事務局： 認知症のプログラムは昨年も講師を呼んで行っている。その際は、自分で来

られる方ということで若年性の認知症の方に絞って参加いただいた。今年は、スタッフだけで実施出来るよう考えて、川崎・横浜の施設に声がけをした。その時にいただいた話が、数人だけを参加させるには施設の手ががなく、施設単位で動くとかかなりの人数の参加になるというもので、それに対応するには当館のスタッフが足りない。しかし、イベントとして行い、個人で来館してもらおうとすると場所柄ハードルが高く難しいということが分かった。視覚障害者の方についても、個人で来館するのはなかなか難しいという状況もある。今年、クラウドファンディングを実施した関係で点字図書館等の視覚障害者向け施設の方から問い合わせをいただいて、バスをチャーターして遠足の様な形で何回か利用いただき、30分程度の案内を行うというようなことを行った。そういう形であると利用者もアクセスしやすく、美術館側も対応しやすい。個別のイベントというのも一つのやり方ではあるが、団体で来ていただいて、団体にあったプラスαのサービスを提供するというのも方法であると考え、そちらの方向に力を入れていきたいと考えている。

加藤委員： 平塚市美術館でも認知症の方向けのプログラムを行った。一人で来るのは難しいということで、募集の範囲を「認知症の方でもいい」という表現にして介助されている方も一緒に楽しめるプログラムとし、さらに、参加者が認知症だとわからないようにするなどした。また、市の高齢福祉課とも連携をして地域の施設に声をかけつつ公募を行った結果、予定人数まで集まった。それでも、当日来られない人やプログラムの最後まで参加できない方もいたりして、結局どのようにやっていくのが正解という一律の正解はないのではないかと感じた。認知症は個人で違いが大きく、色んなやり方があってその中で一番合ったものをそれぞれ見つけ出していくしかないだろうと思った。また、平塚市美術館はもともとの来館者に高齢者が多いので受け入れられやすかったということはあると思う。それぞれの美術館の特色のなかで、どうアプローチしていくかというのは一つではないと思う。新しい分野であり、どのように実施したらどういう結果があったという情報は欲しいと思うので、お互い情報交換ができる場が出来るとよい。

事務局： ぜひ来年度は、平塚市美術館が実施する際は、見学に行かせていただき、交流が持てるとよいと思う。

橋本部会長： 施設設備について、今25年を迎えているが、今後は加速度的に修繕箇所が増えていくと思われる。これを館全体の問題として捉えて欲しい。世田谷美術館でも40年を迎えるが、排水設備に亀裂が入り樹木が根を張り、逆流するということがあった。これだけの建物を他に建てるというのは将来的にもなかなか難しいと思われるので、メンテナンスを細かく行い長く持たせることが出来ればよいと思う。

【事務局より令和7年度事業予定および事業評価について説明】

橋本部会長： 防災訓練についてはされているか。避難エリアの指定や、広域避難所にはなっているか。

- 事務局： 防災訓練はしており、生田緑地が広域避難所に指定されている。東口のビクターセンターは避難所になる。一方で西口側は土砂災害の可能性もあるエリアではあるので、大きな災害が起きた時のことは心配している。
- 橋本部長： 避難者の美術館での収容は想定されているか。
- 事務局： 美術館は避難所になっていないが、公共交通機関が途絶するなど行き場がないというようなことも想定できるので、来館者に一時滞在をしてもらうことは考えている。また、そういう方の対応のため水や毛布等を提供できるようなことも考えている。
- 橋本部長： 世田谷美術館と岡本太郎美術館は環境が似ている。また、世田谷美術館は環八、首都高、東名高速に囲まれて火災が起こってしまうと孤絶した状態になりかねない危険なエリア。他の館の対策についても学びたいと思っている。美術館はスペースもあって広い場所ではあるので、一体どういう役目を果たせるのかということは重要な課題。
- 加藤委員： 平塚市美術館は東南海トラフ地震の津波の危険範囲に入っている。想定される被害をきちんと把握することは重要。津波の場合、そこに留まるということが誤った判断になりえるので、そういう状況のことも考えている。
- 長門委員： 通り一遍ではいけない。垂直避難などいろいろなことを考えなければいけない。その美術館に応じた計画が必要というのはリアルに感じている。
- 橋本部長： このことは、館の運営を考えるうえで欠くことのできない要件の一つであると言える。
- 事務局： 加藤委員のキッチンカーの話について補足する。生田緑地の周辺は飲食を提供するところが限られているため、キッチンカーとカフェでお客を奪い合うということではなく、また、提供するものも被らないキッチンカーを誘致しているので、共存共栄できている状況。キッチンカーは指定管理者が調整しており、生田緑地全体の賑わいの創出と飲食の提供という観点から行っている。美術館だけで行っているものではない。
- 加藤委員： 以前に、自身でもキッチンカーを呼ぼうとしたことがあるが、行政の理論では非常に呼びづらいところがあり、実施出来なかったもので、気になったところである。
- 事務局： 今回の TARO マルシェは、指定管理者のキッチンカーとその年に入選した TARO 賞作家のワークショップや作品展示をあわせた形で開催した。今年も 6 月ごろに指定管理者がマルシェを行う話があり、そこでも美術館の企画と上手く連動できる形で実施できるよう考えている。
- 加藤委員： そういう意味でもバランスが取れていると思う。

○ 閉会